2017年9月24日

福音書からのメッセージ

自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。
（マタイによる福音書20章14節）

今日のたとえ話には、ぶどう園の主人とそこで働く労働者が出てきます。しかしイエス様が語られた内容は、ありえないものでした。イスラエルのぶどう園での労働は過酷です。その地域のぶどう園には、ツルを巻き付けさせるための棚がありません。乾燥しているため、地面の湿気を心配しなくてよいからです。したがってぶどうは地面や丘の斜面といったところに育つため、収穫のときに太陽をさえぎるものがありません。だから大変な重労働になるのです。

つまり、夜明けからぶどう園で働いていた人たちは、約12時間、ものすごい苦労をして働き続けたのです。だから、自分と比べてわずかしか働かなかった人よりたくさんの賃金を求めたとしても、なんら不思議はありません。

しかしここで、確認しておきたいことがあります。イエス様は「天の国は次のようにたとえられる」と言って、このたとえを始められたということです。一見不公平に見える物語ですが、これは天の国の物語です。神さまの基準をわたしたちに示しているのです。

イエス様はファリサイ派といった、ユダヤ教の主流派の人たちと対立していきました。ファリサイ派は、この物語の夜明けから働き出した人たちだと言えます。彼らは神さまのことを第一に思い、律法を忠実に守ろうとしていきました。そしてあらゆる罪から、自分たちを遠ざけようとしていきます。彼らは人々の目から見たら、正しい人でした。わたしはずっとあなたのために働いていますと、胸を張って言っていました。そして神さまからご褒美がもらえるのを待つ、そういう人たちでした。

一方、5時ごろにようやく声を掛けられた人には、その時間までかかった様々な理由があったと思います。しかし一つだけ、彼らに共通していたことがあります。それは、広場で待ち続けていたということです。常識的に考えて、もう雇ってくれる人が来る時間ではありません。でもこのままでは、生きていけないのです。救いの手を待つしかなかったのです。

イエス様はそのような人たちと、関わって来られました。罪人や徴税人といった、だれにもかまってもらえずに、すべてをあきらめ、途方に暮れていた人たちと交わりを持たれました。それは神さまのみ心です。何時になろうとも、何度でも神さまは広場に出向きます。そして人々のところに来られ、声を掛けて連れて行き、必要なものを与えられます。「そうしたいのだ」、と神さまは言われているのです。

神さまは、何度も広場に行って、まだぶどう園に来ていない人を探し続けます。人々がぶどう園に足を向けるのではありません。神さまが、「さあ、ぶどう園に行って、働きなさい」と言われ、人々はただ、その声に従うのです。そして神さまはわたしたちを含むすべての人に、十分な恵みを与えられます。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/